

Title	経済静學と經濟動學(三)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1929), 29(5): 680-693
Issue Date	1929-11-01
URL	https://doi.org/10.14989/129815
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷九十二第

行發日一月一十年四和昭

論叢

營業税に於ける累進課税 法學博士 神戸 正雄

平均生産力説について 文學博士 高田 保馬

我國に於ける生命保險業の首唱と先驅 文學博士 三浦 周行

經濟靜學と經濟動學 文學博士 米田庄太郎

說苑

北米合衆國の農業問題 經濟學士 八木芳之助

景氣變動と日本資本主義の成立 經濟學士 谷口 吉彦

明治政府の貸附金 經濟學士 吉川 秀造

雜錄

漁業についての一管見 法學博士 財部 靜治

徳川時代の商人カルテル 經濟學士 菅野和太郎

獨逸信用組合の近狀 經濟學士 楠見 一正

禁漁制度に就て 經濟學士 岡本 清造

新地租法案の税率 經濟學博士 沙見 三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

經濟靜學と經濟動學 (三)

米田庄太郎

(六) 經濟動學及び經濟靜學の概念を科學的に

規定する一般の方針に就て

シュトレルラーの論ずる處によれば、今日までに經濟學に於て立てられたる靜學(靜態)と動學(動態)との區別は、總て論理的方法論的に確立されて居るものでなく、只類比的アナロギックに立てられて居るに過ぎない。即ち根本的には力學に於ける靜學と動學との區別に類比して、又一般的には、海洋の波の現實なる高低と、之を測る爲めに靜的水平面を假想することゝになすらへて、立てられたるものである。尙ほ經濟動學の概念は、單に經濟靜學の補充として、殊に粗雑に規定されるだけに止まつて居る。そして經濟學は、根本的に靜學と動學との二部門に分たる可きものであるや否やは問題であるが、とにかく今日までに多數の經濟學の大家が認めた如くに、此の區別が立てらる可きものとすれば、夫れは只類比的又は比喩的に立てられるに止まる可きものでなく、論理

的方法論的に確立さる可きである。然らば此の區別は如何にして、論理的方法論的に確立さる可きか。

シュトレルラーは先づ靜學(靜態)及び動學(動態)の概念を、一種の相互に補充する概念對ゲリツツス・パールとして確立する形式的條件を、ウインデルバント及びリツケルトの學問論によりて究明せんとして居る。かくて彼は右の學問論に従ふて、概念構成の根本的方法を普遍化方法と個體化方法とに大別し、隨ふて又概念を普遍的概念と個體的概念とに大別し、そうして科學を、普遍化方法によりて普遍的概念を確立せんとする自然科學と、個體化方法によりて個體的概念を確立せんとする、即ち個體的なるものを個體的なるものとして記述せんとする歴史科學とに大別して居る。尙ほ彼は科學の直接對象となるものは、經驗されるがまゝのものでなく、之れに思维的に加工して構成されたるものであると見る見解からして、科學の經驗對象と認識對象との區別を重要視して居る。

シュトレルラーは右の見地からして、靜態及び動態の概念が、相互に補充する概念對を作り、靜學及び動學が相補充する經濟學の二部門をなす可くは、先づ靜態及び動態の概念の一方、普遍的概念にして他は個體的概念であつても、亦兩者共に個體的概念であつてもならないので、よろしく兩者共に普遍的概念であらねばならぬと考へ、次に兩者は同じ經驗對象から引き出され、同

じ範疇に屬する、二つの相異なる抽象等級でならねばならぬと考へて居る。かくて彼は「靜態及び動態の兩概念は、理論經濟學に於て、只夫れが二つの相異なる抽象等級である時にのみ、或は一の概念が認識對象其の物に相應し、他の概念が方法的理由によりて夫れから引き出されたる、より高き抽象である時にのみ、同じ認識對象に屬し、一對をなし、相互に補充するのである」と云ひ、又「動學は靜學を補充すると云はれるならば、是れ靜學は上位概念にして、動學は下位概念であることを意味するので、兩概念は抽象によりて同じ經驗對象から生起し、同じ範疇に屬するのである。同じ經驗對象から抽象によりて異なる範疇の普遍的概念は生起し得るが、併しかゝる普遍的概念は決して相互に補充し得ない。」と云ひ、又「動態の概念は下位の概念であるから、靜態の概念よりもより大なる内容を有する。そうして此の理由から、第一に靜態の一切の問題は動態の中に、一緒に現はれて居なければならぬ。是れ動態に於ては靜態の一切の構成要素が含まれて居なければならぬからである。第二に動態は更に、靜態の中には觀察し得られない諸問題を含まねばならぬ。是れ其等の問題が附着する概念諸成分は、靜態に於ては缺けて居るからである」と論じて居る。

要するにシュートレルラーの論ずる處によれば、靜態及び動態の概念の國民經濟學に於ける應用は、只兩者が概念對をなす時にのみ合目的である。そうして夫れが爲めには、兩者共に國民經濟

學に於ける同じ枝に、即ち理論的國民經濟學か又は實際的國民經濟學かの、何れにか屬せねばならぬ。然るに實際的國民經濟學にありては、靜止的及び進歩的經濟と云ふ語は、既に一般に使用されて居るから、靜態及び動態と云ふ語は、只理論に於てのみ應用さる可きである。併し此等の兩概念が理論に於て應用され得る爲めには、兩者ともに普遍的概念であらねばならぬ。又兩者が概念對をなす爲めには、抽象によりて同じ經驗對象から生起し、同じ範疇に屬せねばならぬ。即ち靜態及び動態は同じ經驗對象から構成されたる二つの相異なる抽象等級であらねばならぬ。そうして靜態はより小なる内容を有するから、上位概念である。されば靜態の一切の概念内容は、動態の中に含まれて居なければならぬ。かくの如く靜態の一切の問題は動態の中に現はれ、動態は更に靜態に缺ける理論經濟學の他の總ての問題を包含するが故に、動態よりも尙ほ低き抽象等級は、最早何等の任務も有しないであらう。されば動態は理論經濟學が使用する最低抽象等級にして、其の外に尙ほ理論經濟學の特殊な思惟對象或は認識對象はあり得ない。かくて動態は理論經濟學の認識對象全體を意味するのである。併し理論經濟學の一切の問題は動態の中に含まれて居るとしても、其等の問題は悉く動態に於て解決し得られるのでない。是れ動態は何れの問題に就ても、精密的把握を許さない多くの内容を含んで居るからである。かくて方法的理由から見て、此等の攪亂する内容は捨象されねばならぬ。そうして方法的理由によりて、動態から

引き出され、精密的に把握され得る抽象態として、此處に靜態が存立するのである。

シュートレラーは以上述べし如くに、先づ靜態及び動態の概念の形式的條件を、論理的に決定したる後、更に兩者の實質的内容を決定せんと企だてゝ居る。そうして結局時間を以て、靜態と動態とを區別する概念要素と認めて居るのであるが、彼の論ずる處によれば、一の經濟が其の何れの市場に於ても、供給と需要との間に合間(時間的距離)が存することなしに營まれるならば、其の經濟に於ては生産が變動する總ての傾向及び可能性は虧缺する。其の傾向の虧缺するのは、是れ供給と需要とは充分に合致するが爲めであり、其の可能性が虧缺するのは、是れ新しき生産が行はれ得る時間がないからである。かくてかゝる經濟に於ては、一切の市場は均衡を保つて居るから、吾人はかゝる經濟を靜態的と稱し得る。要するに靜態とは時間的經過なしに行はれる經濟である。されば時間と云ふ概念要素を捨象すれば、それで安定的均衡を思惟必然的ならしむるに充分であるので、人口數の變動も、其の他何れの附隨的事情も顧みるを要しない。靜態の一般的特質は時間の虧缺である。

併し又只不安定的均衡のみが可能にして、安定的均衡は全く可能でない經濟概念が立て得られる。動態にありても、消費市場に於て均衡が支配し得る、即ち供給と需要とが時間的に完全に合致し得る。併しそうでない場合も同様に考へ得られる。しかも均衡が考へ得られない様な動態

は、決して靜態の下位概念であり得ず、兩概念は概念對をなす可きであると云ふ要求に相應し得ないであらう。是れ下位概念は上位概念の一切の成分或は要素を含有せねばならぬからである。動的均衡は常に不可能でないのみならず、動態の概念は實に、只夫れに於て一の均衡が考へ得られる場合のみ、其の目的を成就し得るのである。しかも動態に於ては、均衡は決して思惟必然的に存在するのでなく、只考へ得られるだけのもの、かくて偶然的なものである。されば時間動態の本質的要素である。そうして夫れは又動態的問題の本質的要素であるから、時間と云ふ概念内容は、靜態と動態とが依て以て區別される處の、求められたる要素であると云ひ得られる。時間因素を本質的要素として保有する各概念は動態に屬し、時の経過から獨立して考へ得られる各概念は、靜學に於て使用し得られる。吾人は數學的概念を借用して、一切の線的量は靜學に於て、一切の正方形的量(或は自乘量)は只動態に於てのみ使用し得られると、或は一切の線的量は靜學的概念にして一切の正方形的量(或は自乘量)は動態的量であると云ひ得る。

要するシュトレルラーの考へる處によれば、供給即ち生産の方面、及び需要即ち慾望の方面に於ける各變化は、「時」を要する。そうして此の「時」は、只經濟的行爲が時間的に直ちに相適合しない場合、或は供給と需要とが相互に他を待たねばならぬ場合にのみ存在する。各供給が直ちに需要を見出し、各需要が直ちに供給を見出すならば、經濟進行に於て何等の變動も可能でなく、

經濟は均衡を保つのである。かゝる均衡を保つ經濟を、吾人は靜態と稱するので、靜態とはつまり個々の經濟行爲の間に現はれ得る合間或は時間から、全く抽象されたる一の經濟概念である。之れに反して動態とは、つまり時間が一の重要な概念要素となつて居る一の經濟である。約言すれば其の本質的要素が時間的經過である處の諸概念は動學的概念にして、夫れに於て時間が全く概念要素となつて居ない諸概念は靜學的概念である。

却說シュトレルラーは以上述べし如くに、靜態(靜學)及び動態(動學)の概念を、先づ形式的條件から、次に實質的内容から考へて、以て論理的方法論的に精確に規定し、かくて理論經濟學の相補充する根本的二部門として經濟靜學の概念及び經濟動學の概念を、論理的方法論的に確立せんとするのである。そうして彼はかくの如くに論理的方法論的に、經濟靜態及び靜學の概念并に經濟動態及び動學の概念を、嚴正に規定せんと企てたるものは、是れまでの處では只彼れのみであると思ふ。私も其の事實は承認する。彼以前に彼の如く論理的に此の問題を論究したものはないと思ふ。併し彼の論理的規定は果して論理的方法論的に正當であらうか。是れ私が之れより考察せんとする問題である。

上に述べし處によりて知られる如く、シュトレルラーは先づヴァインデルバント及びリツケルトの科學論を其のまゝに承認して立論の基礎となし、總て普遍化方法によりて普遍概念を構成せん

とする科學は自然科學であると認め、理論經濟學も普遍化方法を用ひて普遍概念を構成せんとする科學であらんとする以上、一の自然科學であらねばならぬと見るのである。併しウインデルバント及びリツケルトの科學論は果して其のまゝに、學問論上承認し得られるものであるか。是れ私がシュトレルラーの説を批判的に考察するに當つて、先づ呈出せんとする最根本的問題である。併し私は便宜上此の問題を最後に論ずることゝして、先づシュトレルラーの如く、經濟靜態の概念と經濟動態の概念とは同じ範疇に屬する二つの普遍概念にして、形式的に見れば二つの相異なる抽象等級であり、即ち後者は前者よりも抽象の度合のより低き普遍的概念、理論經濟學上實際に抽象の度合の最も低き概念であり、又實質的に見れば時間要素の有無を決定的概念内容となすもの、即ち靜態の概念は無時間性を本質的要素となし、動態の概念は時間性を本質的要素となすものであると認めるに於ては、經濟動態は果して、シュトレルラーの考へる如く、經濟靜態と同様に自然科學的に研究し得られるものであるかと云ふ問題から考察し始める。

經濟靜態の概念はさきに述べし處によりて知られる如く、始めから本來假想的なものであると認められて居るほど、抽象性の大なる、大に單純化されたものである。そうしてさほどまで抽象され單純化されたものとして經濟靜態は、自然科學的に研究し得られるものと考へ得られる。

(但しさほどに抽象され單純化されたものとしても、之を自然科學的に研究する以上、或は研究するに止まる以上、) かくて其の眞義は到底充分に了解し得られないと云ふのが私の見解であるが、此の點に就ては後に論ずることとする。

經濟靜學は、さきに述べし處によりて知られる如く、バレット、クラーク、シユムペター等の諸家の努力によりて、自然科學として大に發達したのである。然るにシユトレルラーの考へる如く、經濟動態は理論經濟學の認識對象としては、形式的には抽象の度合の最も低き、又實質的には時間を本質的要素となすものと見るに於ては、夫れは形式的には内容の甚だ豊富な、又實質的には絶へず時間的に變動する、現實なる經濟に大に接近するものにして、かゝるものとして經濟動態は果して自然科學的に研究し得られるものであらうか。夫れは到底不可能であると認め、結局廣義の歴史哲學の一種として、經濟動學を建設せんとする新舊獨逸歴史派經濟學の發達せる事情を考へると、吾人はシユトレルラーの見解を到底承認することが出來ないと思ふ。

嘗に經濟現象のみならず、何れの社會現象も、現實にあるがまゝでは云ふまでもなく、シユトレルラーが立てた經濟動態の概念の如き抽象されたるものでも、其の内容が大に豊富にして、又時間的に變動することを其の本質的要素となすものと認められる以上は、到底嚴密に自然科學的には研究し得られるものでないので、之を自然科學的に研究した或は研究して居ると稱する人々も、詳しく調らべて見ると、其の研究には實際上目的論的考察が種々に混交され、又自然科學的方法は或は廣められ、或は狭められ、種々に改變されて使用されて居るので、方法論上正當に自然科學的であるとは到底認め得られるものでない。此の點に就ては近來社會學方法論上、社會學

を自然科学として建設せんとすることは、到底不可能であると見る論者の所説は、經濟學者も大に參考す可きものと思ふ。そうして其の所説の根本思想は、私がさきに本紙上に發表せる、晩近の社會學方法論を批判せる論文中に述べたる、パールの社會學方法論に對するトレールチの批判によりて、大體上學ぶことが出来るから、私は此處に改めて論述することは省く。本論文の讀者は右の論文を參考されたい。

さればシュトレルラーはタトヒ經濟靜態及び經濟動態の概念を、さきに述べしが如くに、一の概念對として論理的に精確に規定することが出来たとしても、經濟靜態を研究する經濟靜學が、自然科学的學科として建設し得られると同様に、經濟動態を研究する經濟動學が、自然科学的學科として建設されることは出来ない。かくて經濟靜學と經濟動學とは、彼の論證したと信する如く、理論經濟學或は自然科学的經濟學の相補充する根本的の二部門としては確立されることは出来ない。そうして理論經濟學或は自然科学的經濟學としては、只經濟靜學が存立し得るのみにして、シムペターやオッペンハイマーなどの如く、「總てのよき理論は本質的に靜學的である」とか、又理論經濟學は本質的に靜學的であると云はざるを得ないので、經濟動學は只廣義の歴史哲學的一學科としてか、又は哲學的及び實際的一學科として存立し得るが、決して自然科学的一學科としては存立し得ないものであると認めねばならぬ。

然るに更に進んで學問論的に考察すると、さきに述べし如くに、方法論上の必要條件として大

に單純化され、抽象の度合甚だ大なる、假想的なるものとさへ認められて居る經濟靜態なるものも、果して嚴密に自然科学的方法によりて研究し得られ、經濟靜學は一の自然科学的學科として、正當に建設し得られるものであるか、問題となつてくる。そうして此の問題は今日の社會科學一般方法論上から當然起らざるを得ない、甚だ重要な根本的一問題であるのである。

社會學者の中には、社會動態は自然科学的に研究し得られないが、併し社會靜態或は社會の形式は自然科学的に研究し得られ、又經濟靜學或は社會の形式の學としての社會學は、自然科学として成立し得ると、又夫れが眞の社會學であると見る人々も、社會靜態或は社會の形式も自然科学的に研究しては到底其の本質或は眞義は了解し得られるものでなく、社會學は其の全體に於て、根本的には自然科学として建設し得られるものでないと思ふ人々がある。然らば後者の人々は社會學を根本的に如何なる方法を用ひて研究し、之を如何なる學問として建設せんとするかと云ふに、今日特に注意すべきは、現象學的方法によりて、本質學或は本體學として建設せんとする方針、了解心理學的方法によりて精神科學として建設せんとする方針、及び了解と説明とを結合する特異なる方法によりて、特異なる文化科學として建設せんとする方針等である。併し私が見る處によれば現象學的方法を用ひて、社會學を一の本質學として建設せんとする方針は、決して社會學を科學として建設するものでなくして、之を哲學的一學科に化するもの、即ち社會哲學の建設に了るものであることは、明白であるのみならず、其の他の二方針も詳しく吟味すれば

結局同一の結果を齎らすものであることが覺られるのである。かくて今日社會學は根本的には自然科學として建設し得られないと見る人々は、結局之を一の哲學的學科に化成して居るので、眞に科學としての社會學は、まだ方法論上確立されて居ないと云はねばならぬ。

私は今日の經濟學も方法論上から見れば、同一の状態にあると思ふ。經濟靜態なるものも、純自然科學的に研究しては、到底充分に其の眞義は了解し得られるものでない。之を純自然科學的に研究すると稱して居る人々の所論に就ても、詳しく嚴密に吟味して行くど、所々に目的論的考察が變裝して混交して居ることが發見されるので、フオゲルはさきに述べし彼の著書中に、シエムペターの經濟靜學に就ても其の點を指摘して居る。そうして今や經濟學も根本的には自然科學として建設し得られないものと見て、しかも新舊獨逸歴史經濟學派の如くに、之を一種の歴史哲學に化成することなしに、新しき學問として建設せんとする企だてが勃興して居る。かくて理論經濟學を現象學的方法によりて建設せんとするもの、又は記述心理學的方法によつて建設せんとするもの、又は論理的理想定型の構想によりて現實なる經濟現象を了解又説明する學問として建設せんとするもの、更に其他種々な新しき方針を立てんとする人々がある。併し私の見る處によれば、何れの新しき方針も、つまりは經濟學を經濟哲學或は一種の歴史哲學に化成するものにして、眞に科學として理論經濟學を確立するものでないと思はれる。

かくて私の考へる處によれば、シュトレルラトが立論の基礎とするヴァインデルバント及びリック

ルトの科學論の如きは、新しき科學論として大に價值あるものであるが、しかも其の儘に承認し得られるものでなく、大に修正を加へらる可きものと思はれる。そうして私はリツケルトが、私の解釋する處によれば、つまり器械的構造及び因果的連結を理解することを科學の目標と認め、普通化方法と個體化方法とによりて、一切の科學を自然科學と歴史科學とに、方法論上根本的に大別せんとする見解は、正當であると認めるが、(但し私はリツケルトの論ずるがまゝでは、彼の歴史的文化的科學ではなく、結局哲學的見地即ち彼の價值哲學的見地を種々に混交するものであると考へる。そうして純粹なる科學としては、彼の歴史科學なるものは、つまり對象の個體的なる器械的構造及び因果的連結を究明するものとして解さる可きであると思ふ。)併し科學の範疇は彼の科學概念の表示する境界で盡きて居るのではなく、更に一層大なるものにして、彼が詳しく論究せる處の對象の器械的構造及び因果的連結を究明することを目標とする科學の部類の外に、對象の志向的構造及び志向的連結を究明するを目標とする科學の他の部類が、學問論的に確立されねばならぬと考へる。そうして私は前者の科學部類を理解科學と稱するに對して、後者の科學部類を了解科學と稱し、(但し私は了解科學と云ふ語を用ひるが、併し私の了解科學の概念は獨逸哲學者の了解科學の何れの概念とも異なつて居るので、私は並も哲學的見地或は考察を混交せずに、經驗的事實として對象の志向的構造及び志向的連結を究明せんとするものを了解科學と云ふのである。)社會學や經濟學を始め一切の社會科學は、了解科學として始めて純科學的に建設し得られるものと確信して居るのである。

然るに今右に述べし如く、經濟學、嚴密に云はゞ科學としての經濟學は、私の云ふが如き了解科學として、始めて純粹なる科學に築き上げ得られるものと思はれるに於ては、之を力學になすらへて經濟靜學と經濟動學との根本的に二部門に別つことは、方法論上正當であるかは問題となる。

そうして私は社會學を根本的に純正社會學と總合社會學との二部門に別つに準じて（社會學の此の
ては、さきに本雜誌に連載せる、社會學方）、經濟學をも純正經濟學と總合經濟學との二部門に別つのが方
法論に關する私の諸論文を参考されたい。）經濟學上最も正當であらうと信じて居る。併し靜學或は靜態及び動學或は動態の概念を、あまり
力學的意味に囚はれずに、一般に哲學や幾多の精神科學に於て用ひられて居るが如き、廣い意味
に解するに於ては、科學としての經濟學の根本的二部門を、經濟靜學及び經濟動學と稱しても差
支はないと思ふ。尙ほ經濟靜學及び經濟動學と云ふ語を用ひるは、純正經濟學及び總合經濟學と
云ふ語を用ひるよりも、經濟學の認識目標を一層直接に明示するに便利であると云ひ得られる。
蓋し一切の理論的學問の認識目標は、つまりは一定の意味での靜的或は靜學的認識及び動的或は
動學的認識を求めるとあると、考へ得られるからである。

却説私は今日の米國の經濟學に於ける根本的の二大方針としての、限界經濟學と制度經濟學との
對立、殊に後者が前者を壓倒せんとする傾向は、つまり經濟靜學を偏重する方針と經濟動學を偏
重する方針との對立、及び歐洲大陸に於ても今日勃興しつつある處の、後者が前者を壓倒せんと
する傾向と、方法論上根本的に同一のものであると認め、かくて先づ經濟靜學及び經濟動學の概
念の規定を、本論文「經濟靜學と經濟動學」に於て方法的に概論したのであるが、是れより上に
述べし私の見解の一般的主旨を、特に米國の限界經濟學及び制度經濟學を批判的に考察すること
によりて更に詳しく論述したいと思ふ。